P2-5　訪問に携わる作業療法士が伝えたいこと インタビュー調査からの質的研究

○前田 浩二（OT），杉本 久美子（OT），宇野 恵美子（OT）
滋賀医療技術専門学校 作業療法学科

Key word：訪問作業療法，在宅支援，地域

【はじめに】第3次作業療法5カ年戦略では，地域包括ケアシステムの構築に寄与する作業療法士（以下，OT）が求められ，地域医療・福祉への貢献が期待される．2015年の作業療法白書によると老人福祉法・介護保険法関連の領域のOTは協会員全体の13%程度であり多いとは言えない．本研究では老人福祉法・介護保険法が主に適用となる地域で活躍する訪問OT経験者へのインタビュー調査から，訪問OTの特徴を明らかにした．このことで，今後訪問OTを目指す人が増えることを期待する．

【対象】訪問OTの経験者8名を対象とした．対象の内訳は，男性3名・女性5名．訪問OTの経験年数は，1年～7年．

【方法】質問は「これから訪問OTを行うOTに伝えたいことはなんですか」とし，半構成的インタビューで聴取した回答を3名の訪問OT経験者が分析し，カテゴリー化してラベルを付け抽象化レベルを上げた．インタビュー協力者には事前に研究内容を伝え，データの使用についての同意を得た．データは今回の研究目的以外で使用することはなく，鍵付きのロッカーに保管し，発表終了後にはシュレッダーにて破棄するもとする．

【結果】最も抽象化したラベルは1.「OTとして楽しい」2.「知識と技術と経験が大事」3.「指導体制が必要」4.「対象者との向き合い方」5.「一人で行動するメリット」となった．

【考察】結果①「OTとして楽しい」について．インタビューの語りの中に，「在宅生活で明確になったニーズに介入することが楽しい」「対象者の生活そのものに触れることが楽しい」「院内にいる時よりも他職種との関りが増えることが楽しい」とあった．対象者の在宅生活は，スケジュール表のない1日24時間を過ごすことである．対象者は，仮の住まいであった病院や施設ではない，実生活での環境から求められる活動，あるいは他者から求められる活動に応えなければならず，それゆえに生じる生活のし辛さに直面する．そこから生まれる実生活上の真のニーズにアプローチしていくことにOTとしての確かな役割を実感できるからこそ，OTとして「楽しい」と伝えられるのだと考えた．また，他職種と対象者を中心とし，同じ目標に向かい，様々な情報の共有や意見交換ができる機会が多いことにもOTとしての「楽しさ」を感じているのではないだろうか．

一方で楽しいばかりではなく，「経験がないと難しいと思う面もある」や「リスク管理・トランスファー・福祉用具」などに関する回答がある様に，訪問OTに就くためには「知識と技術と経験」が必要だと感じていた．院内では，多くの先輩OTのパフォーマンスを見て学び，聴いて学ぶ機会が日常的にある．そこから学んだ知識や技術は教科書では得られない実際に活用できるものとして蓄積されるが，訪問OTの現場は一人であり，日常的に見て聴いて学ぶ機会が得られず，OTとしての成長に時間を要すると考えられた．また，院内では翌日に持ち越せる課題を，訪問OTではその時その場面に必要なこととして提供しなければならない．ゆえにそのニーズに応えられる知識や技術の蓄積が必要であると考えられた．

では，「知識と技術と経験」の蓄積がないOTが訪問OTとして働くことは難しいことなのか．インタビューの回答から「タイムリーに情報を共有し，すぐにアドバイスがもらえる環境があることが大事」とあり，「知識と技術と経験」を補う指導体制の有無が訪問OTを育てる鍵であると示唆された．